551.5: 06

1957年度春季大会特輯（I）

1. 気象学会の大会及び総会を名古屋に迎えて

鈴　木　　要*

今年初めて，名古屋に於て大会が開かれた．そして，その事務局を引受けた名古屋地方気象台は，大会数日前から蟻の巣をついたような騒々しさになった．会場の整備，宿舎の手配，仕事の順序，など，片手落ちのないように，各課寄り集って協議した．何しろ初めての事である．全国の著名な学者が集まる大きな会議である丈に，出来る丈慎重を期して，遠来の客に悪い印象を与えたくない，というとり越し苦労が大きい．とに角勤務の方は万障繰り合わせて，大会3日間を通しての作業分担がきめられた．それには，現業員以外全部を動員したので，手うすな時に何か事が起らなければ，と内々は心配であった．傍から見れば，仰々しすぎると笑われそうな程であるが，結構まだ手は足りない位だった．というのは，会場は，もともと教室であるから，こういった会議向にするため，机を動かしたり設備を整えたりで，便の悪い大学，気象台間をいったりきたりしたからである．

そうして，ごたごたするうちに，どうやら大会を迎える事が出来た．

地方に於ては，気象集誌，天気によって，このような大会の片鱗を知る位のものであるが，今度初めて，その雰囲気にふれることが出来たのは，大変嬉しい．いつもは型にはまった仕事に追われ乍らも，この日許りは，有名な学者と席を同じくして，一かどの学者になったような気がした．そして田舎者が町へ出て来たように，肝心の講演はそっちのけで，きょろきょろ会場を見廻して，ささやき合ったりした．「あの人が○○の権威，○○博士だよ」「○○教授はどの人だ」などと，名前は知っていても，顔はわからないので，名前と顔を一致させるのに一生懸命である．

しかし，講演者の顔ぶれの若いのには驚いた．別に若いわけではないが，10年前と殆んど変らない名古屋地方気象台では，最年少クラスに相当するので，余計そんな気がしたのである．活発な意見を交しているのも，これらの若い人達が多く，新らしい気象学はこの人達の手によって創られていくのだ，という感を深くした．それと同時に又，同じ世代であり乍ら，地方の安易な生活環境にある私達とは，大きな隔たりが出来ていくようなコンプレックスにとらわれた．

その意味に於ては，本大会は，私達へのよい刺激剤であったともいえよう．「どんな環境にあっても，気象に従事する人は，絶えず研究心と向学心がなくてはならない」とは岡田先生の教訓である．地方にあっても，やはり，この教訓を守り同じ世代の私達が原動力になって，旺盛な研究心を培っていかねばなるまい．

百近くもある講演題目の中で，どうやら内容のわかったというのは，数える程しかなかった．これは，私の不勉強のせいであろう．しかし，会場を見渡したところ，わからない人は，私のほかにも沢山いるようだ．というのは題目によって，会場が白けたり，熱が入ったりするのが，初めての私にも，はっきりわかるからである．少し自分の専門からそれると，関心もうすくなるだろうが，同じ気象学である以上，もう少し会場全般の人がわかるような話し方は出来ないものだろうか．この点，経験を積んだベテラン講演者は，わかり易いが，若い人達は，難かしい話を一層難しくしているような気がする．何だか自分丈に聞かせているような話し振りのものがある．講演用のビラやスライドについても同様な事がいえる．比較的前の方に席をとっていた私達にも，よみとれないような細かさで，ぎっしりと書いたのがある．そして，短い時間でそれ丈全部説明し切れず，とびとびの中途半端で終ってしまう．これなどは，初めから要点丈を大きく書いて説明したら，聞く人はもっとわかり易くなるのだが……．こんな所にも会場の白ける一因がありそうな気がする．口はばったい事をいって叱られそうだが，講演方法の巧拙が，会場の運営に重大な役割を演ずるものであることを，この大会ほどはっきりさせてくれたものは今までに経験しなかった．そのほか，所定の時間を無視した，演者や質問には，研究者らしい熱心さがうかがわれて，時間超過を心配はしたが，好感がもてた．

このようにして，大会も無事終り，吉武台長以下一同やっと解放された．僅か3日間の会議ではあるが，あれやこれやで随分長かった．しかし，これで一通り要領もわかったから，この次の名古屋大会では，こんな大騒ぎや気苦労をしなくても，うまくやれそうである．何年後か知らないが，その時は又，数値予報や長期予報なども一段と飛躍していることだろう．何れにしても，これからもしばしば大会を名古屋に迎えられるだろうと，まことに心強い．気象学の先駆者達から，直接手をとって啓蒙される為には，会場整備の労力など喜んで提供したい．

* 名古屋地方気象台